

城下町膳所とその周辺の 歴史文化

膳所

晴嵐

富士見





城下町膳所とその周辺の歴史文化



膳所城跡公園航空写真

縄文時代～平安時代

この地域は、古くは粟津と呼ばれ、江戸時代の膳所城と城下町、大正時代からの工業地帯、昭和40年代から開発の進んだ山手の住宅街と、特色ある歴史をもつ、膳所、晴嵐、富士見の各小学校区からなります。

琵琶湖と瀬田川、背後の山並みなどの自然環境に恵まれ、古くから人々が生活していたことが、今は琵琶湖の底にある縄文時代の粟津湖底遺跡や、弥生時代の膳所湖底遺跡からわかります。

古墳時代には、秋葉台に4世紀末から5世紀初めの膳所茶白山古墳と小茶白山古墳がつくられました。また、国分一丁目に6世紀中ごろの国分大塚古墳が、6世紀後半には園山二丁目に11基程の小規模な古墳群である園山古墳群があります。

671年、大津宮に都を移した天智天皇が亡くなると、翌年には跡継ぎをめぐる天智の弟の大海人皇子と天智の子の大友皇子の間で壬申の乱が occurred。瀬田橋周辺では、その勝敗を決する戦いがくりひろげられました。周囲には壬申の乱で敗れた大友皇子をまつる社寺が多く、鳥居川と北大路の御霊神社、西の庄の石坐神社と法傳寺などがあります。壬申の乱について記した『日本書紀』には瀬田橋の戦いに関わって、「粟津岡」や「粟津市」など粟津の地名が登場します。瀬田橋の西にあるこの地域は、こののちも瀬田橋の攻防をめぐる戦乱の舞台となりました。

粟津は、大津宮遷都の時、大和(奈良県)の三輪明神が日吉大社に向かう途中で、粟飯が献上されたことから起こった地名と言われます。今も日吉大社の山王祭では、膳所の五社が唐崎神社の

沖で神饌(神様に供える食物)を献上する「粟津御供」が行われています。

奈良時代、聖武天皇は、740(天平12)年に平城京を離れて山城の恭仁京(京都府木津川市)、近江の紫香楽宮(甲賀市)、摂津の難波京(大阪市)と移りました。この途中に禾津頓宮(仮の宮殿)に滞在していたことが記録に見え、この頓宮とみられる建物跡が膳所高等学校の敷地内で見つかっています。

741(天平13)年には、国ごとに国分寺と国分尼寺を建立する命令が出されます。近江国の国分寺は甲賀寺でしたが、820(弘仁11)年から国昌寺がその役割を果たすようになりました。晴嵐小学校には1936(昭和11)年に「近江国分寺址」の碑が建てられ、この近くに寺院があったと考えられています。晴嵐小学校の北側に残る北大路の町名は、国分寺門前の大きな道に由来するといわれています。

759(天平宝字3)年、平城京とならぶ都として保良宮の造営が始まり、宮を守る寺として石山寺の整備も進められました。保良宮の場所ははっきりしていませんが、晴嵐小学校南側の石山国分遺跡のあたりにあったと考えられています。国分団地の中にある「へそ石」、国分二丁目の近津尾神社境内の洞神社(元は「へそ石」の付近に鎮座)にも、保良宮に関係する伝承があります。

鎌倉時代～室町時代

平安時代の終わり、平家を打倒するため木曾(長野県)で挙兵した源義仲は、1183(寿永2)年に京都に攻め入りました。ところが、義仲も源頼朝の命令を受けた源義経に攻められ、粟津の合戦で、家臣で乳兄弟の今井兼平とともに討ち死にしました。義仲の墓は馬場一丁目の義仲寺にあり、兼平の墓は富士見台の「すぐる谷」にあったものが、1667(寛文7)年に膳所藩主本多康将によって晴嵐二丁目の現地に移されました。

室町時代になると、室町幕府を開いた足利尊氏は園城寺(三井寺)を深く信仰し、新羅善神堂(国宝)を再建し、粟津別保の地頭職(土地を管理・支配する権利)を新羅神社へ寄付しています。今も杉浦町の若宮八幡神社には、新羅神社が

まつられています。

この地域には、平安時代から朝廷に食材を献上した粟津御厨や粟津庄に加え、粟津橋本五箇庄、膳所中庄といった荘園があり、国分は石山寺の所領となっていました。

粟津の名前は粟津橋本供御人として京都にも知れ渡りました。粟津橋本供御人は、もともと朝廷へ魚介類を献上していましたが、鎌倉時代の中頃になると京都の六角町に店を借り、販売をはじめました。そして、様々な負担の免除をうける特権を持ちました。

安土桃山時代～江戸時代

1600(慶長5)年、関ヶ原合戦の前におこった大津城での戦いのあと、徳川家康は大津の城を膳所に移し(膳所城)、戸田一西を初代城主としました。膳所城は、琵琶湖上に北の丸、本丸、二の丸、三の丸が並ぶという配置でした。



膳所城から移された膳所神社表門



膳所城から移された篠津神社表門

城下町は、北から西の庄、木下、膳所、中庄、別保の5か村にまたがり、町の中央を東海道が通っていました。北と南の入口には大津口総門と瀬田口総門があり、番所が置かれて城下町への

入口を守っていました。城下町には、東海道にそって、石坐神社、**和田神社**、**膳所神社**、**篠津神社**、若宮八幡神社があります。

膳所藩主は戸田家、本多家、菅沼家、石川家と変わりましたが、1651(慶安4)年本多俊次が7万石で藩主となると、その後は江戸時代の終わりまで本多家が膳所藩を治めました。本多家の菩提寺は、丸の内町の**縁心寺**です。1634(寛永11)年の『寛永石高帳』には、膳所藩領として西の庄村、木下村、膳所村、中庄村、別保村、北大路村、鳥居川村、国分村の名前が見えます。

江戸時代の初めに「**近江八景**」が定められると、瀬田口総門から瀬田橋(唐橋)の間を通る東海道の松並木が、「**粟津晴嵐**」として選ばれました。街道ぞいには茶店が並び、瀬田橋西詰の鳥居川では、セタシジミが名物として売られました。鳥居川は、東詰の橋本、神領とともに、膳所藩から瀬田橋の警護を命じられています。



↑ 明治時代の粟津の松並木



↑ 現在の東海道沿いのようす

瀬田橋が現在のようになかしまを挟んで大橋と小橋となったのは、織田信長の時代からでした。中島は瀬田川の流れの中にあることから、1874(明治7)年に鳥居川水位観測所が置かれました。

江戸時代には、城下町膳所を中心に、文化の華が開きました。江戸時代初めには、藩の御用窯として**膳所焼**が誕生し、文献には国分焼もみられます。松尾芭蕉は膳所に多くの弟子をもち、藩の重臣であった菅沼曲水から提供された国分の**幻住庵**に滞在し、『幻住庵記』をまとめました。膳所藩では、京都から儒学者の皆川淇園を招いて藩主や家臣が講義を受け、やがて藩の学校である**遵義堂**が創設されました。遵義堂があったのは膳所高等学校の場所で、遵義堂の門は和田神社に移築されています。

山手の開発は江戸時代からはじまりました。膳所藩が御用池(膳所池ノ内町)を、中庄村庄屋の堀池又三郎(茂雅)が**三池**(秋葉台)を掘り、ため池を利用した開発が進みました。幕末には、太田重兵衛によって園山で茶が栽培されました。荒れた山々の復興のために植林事業を行った餅九蔵は、膳所藩主からほめたたえられています。

幕末になると、膳所藩も政治的な争いに巻き込まれていきました。徳川幕府14代将軍徳川家茂が上洛した時の混乱では、藩士の一部が処刑される膳所十一烈士の事件もおこっています。

明治時代～現代

1871(明治4)年、廃藩置県によって膳所県が誕生しました。同じ年には大津県に編入され、翌年に大津県は滋賀県と改称されます。膳所城は廃城となり、城門や一部の建物は城下町や領内の神社などに移築されました。膳所城跡は、公園として整備され、市民の憩いの場となっています。

1874(明治7)年、膳所、中庄、別保の3か村が合併して粟津村(明治14年に3か村にもどる)、西の庄、木下が合併して錦村(西の庄の「にし」と木下の「き」とって命名)が誕生します。1889(明治22)年に市制、町村制が実施されると、旧膳所城下町の膳所、中庄、別保、錦が合併して膳所村が、北大路、鳥居川、国分は南の寺辺村等と合併して石山村となりました。

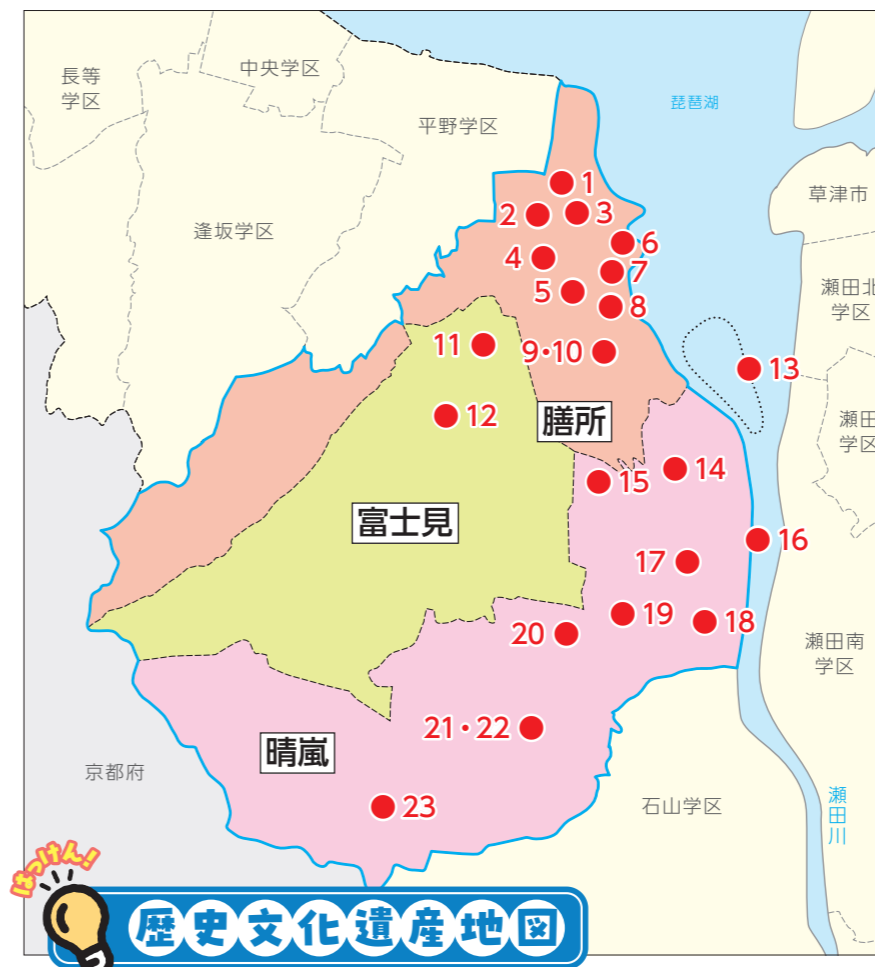
膳所村にはこの後、滋賀県第二尋常中学校(現膳所高等学校)、滋賀県師範学校(現滋賀大学教育

学部)が創設され、1901(明治34)年に膳所町となりました。石山村では1903(明治36)年に国鉄石山駅が開業し、1914(大正3)年には大津電車の浜大津-蛸谷(現京阪石山寺)間が開通し、交通の利便性が高まりました。ちなみに、蛸谷は江戸時代から蛸の名所として知られていました。

琵琶湖と瀬田川をひかえたこの地域には、**旧伊庭家住宅(住友活機園)**や**蘆花浅水荘(記念寺)**のような別荘も建てられましたが、大正時代になると、1927(昭和2)年に操業を開始した**東洋レーヨン(現在の東レ)**に代表される、繊維工場が進出してきました。その結果、人口も増え、石山村は1930(昭和5)年に石山町となりました。

そして、1933(昭和8)年には膳所町、石山町と大津市が合併します。1936(昭和11)年には、石山尋常高等小学校から分かれて晴嵐尋常小学校が、開校しています。

しかし、太平洋戦争の激化は、この地域にも大きな影響を与えました。工場群は、兵器などをつくる軍需工場にかわり、東洋レーヨンはパンプキン爆弾(模擬原爆)による空襲の被害をうけました。



NO	歴史文化遺産名称	場所
1	和田神社	木下町
2	禾津頓宮跡	膳所二丁目
3	縁心寺	丸の内町
4	膳所神社	膳所一丁目
5	篠津神社	中庄一丁目
6	膳所城跡	本丸町
7	蘆花浅水荘(記念寺)	中庄一丁目
8	膳所焼美術館	中庄一丁目
9	若宮八幡神社(放生会)	杉浦町
10	新羅神社	杉浦町
11	膳所茶臼山古墳	秋葉台
12	三池記碑	秋葉台
13	粟津湖底遺跡	晴嵐一丁目地先
14	今井兼平の墓	晴嵐二丁目
15	東洋レーヨン滋賀工場	園山一丁目
16	鳥居川水位観測所	唐橋町
17	御霊神社(壬申の乱伝承地)	鳥居川町・北大路一丁目
18	旧伊庭家住宅(住友活機園)	田辺町
19	石山国分遺跡	光が丘町・田辺町ほか
20	国分大塚古墳	国分一丁目
21	近津尾神社	国分二丁目
22	幻住庵	国分二丁目
23	へそ石(保良宮伝承地)	国分二丁目

戦後、工場は平和産業として復活し、多くの工場も新しく進出してきました。道路整備も進み、1950(昭和25)年に上関寺(逢坂一丁目)から石山までの新道(現国道1号)が、1966(昭和41)年に湖岸の埋め立てにより浜大津から膳所城跡、唐橋、蛸谷を結ぶ湖岸道路が、1974(昭和49)年には大津市膳所と草津市新浜を結ぶ近江大橋が、それぞれ開通しています。

1949(昭和24)年、第四中学校と第五中学校が合併して粟津中学校が誕生し、1952(昭和27)年には南郷中学校(現石山中学校)が分かれました。1963(昭和38)年には晴嵐小学校が現在の場所に移転しました。

山手では、1967(昭和42)年頃から若葉台、富士見台、秋葉台などで宅地開発がはじまりました。1973(昭和48)年に富士見小学校が膳所・晴嵐両小学校から分かれて開校しています。1982(昭和57)年には粟津中学校から富士見・晴嵐両小学校区にまたがって、北大路中学校が分かれました。2005(平成17)年、京阪石山駅が移転し、JR石山駅とながって、駅の周辺は大きく変わりました。

一紀 元 前 一 万 年 前	六紀 元 前 五 〇 〇 前	一紀 元 前 一 〇 〇 〇 前	三紀 元 前 三 〇 〇 前	五 七	二 三 九	後三 世 半 紀	四 世 紀	五 三 八	後六 世 半 紀	五 九 三	六 〇 四	六 〇 七	六 四 五	六 六 三	六 六 七	六 七 二	六 九 四	七 〇 一
狩りや魚をして暮らす			日本へ稲作と金属器が伝来	倭の奴国王が後漢の光武帝より印綬を授かる	卑弥呼が魏に遣いを送る	前方後円墳の出現	大和朝廷が日本を統一し始める	仏教が伝わる		聖徳太子が摂政となる	十七条憲法の制定	法隆寺の建立	大化の改新	白村江の戦い	大津宮へ遷都	壬申の乱	藤原京へ遷都	大宝律令の制定
	●石山貝塚、堂谷遺跡、栗津湖底遺跡が つくられる	滋賀里遺跡などで集落が営まれる	早期	前期・中期 南滋賀遺跡など 方形周溝墓がつくられる	後期 高峯遺跡など湖西南部に高地性集落 ができ、中畑遺跡などで集落が営 まれる	前期 壺笠山古墳、皇子山一号墳、和邇大 塚山古墳などがつくられる	中期 西羅古墳、真野古墳、木の岡古墳群 などがつくられる	後期 ●膳所茶白山古墳がつくられる ●園山古墳群がつくられる			●このころ、膳所廃寺が造営される					●壬申の乱で瀬田や粟津市で戦いがある		

(●は当地域に関すること)

歴史文化遺産 地図番号 13 栗津湖底遺跡

晴嵐一丁目地先 縄文時代



栗津湖底遺跡(滋賀県提供)

栗津湖底遺跡は、琵琶湖の最も南で、瀬田川につながるあたりにある遺跡です。発掘調査は、湖を大きな鉄の板で仕切って、水を抜いてから行われました。調査の結果、約6,500年前の縄文時代早期の川の跡や約4,500年前の縄文時代中期の貝塚が確認されました。貝塚は、当時の人のゴミ捨て場です。そこからは、当時の人が食べたと思われる貝やクリなどが見つかり、栗津に住んでいた縄文人の食生活の一部が分かりました。

歴史文化遺産 地図番号 11 膳所茶白山古墳

秋葉台 古墳時代



膳所茶白山古墳の後円部頂上(葬り塚)

膳所茶白山古墳は、古墳時代前期末の前方後円墳です。後円部の直径66m、前方部の長さ53mの全長119mで、県内では3番目に大きい古墳です。埋葬施設の構造や副葬品は不明ですが、古墳周辺の調査や採集された資料から、埴輪・葺石・周濠を備えた古墳であることが明らかになりました。築造時期は、4世紀末と考えられます。1921(大正10)年に国の史跡に指定されました。なお、後円部の頂上には、大友皇子らを葬ったと伝わる葬り塚があります。

歴史文化遺産 地図番号 20 国分大塚古墳

国分一丁目 古墳時代



国分大塚古墳

国分大塚古墳は、古墳時代後期の前方後円墳です。後円部径32m、くびれ部の幅19m、前方部の先端幅28mで、全長45mです。1973(昭和48)年に実施された発掘調査では、後円部と前方部のそれぞれに横穴式石室をもつ古墳であることが明らかになりました。これは、滋賀県内では唯一となる珍しい事例です。築造時期は6世紀中ごろと考えられます。1976(昭和51)年に大津市の史跡に指定されました。

歴史文化遺産 地図番号 4 膳所神社

膳所一丁目 飛鳥時代～



膳所神社

膳所神社は、膳所村の氏神です。祭神である豊受比売命は、食物を司る神様で、朝廷に食物を献上していたという膳所の歴史に関係しています。もとは湖岸沿い(大津市生涯学習センターのあたり)にあり、江戸時代に膳所城が築城されると、現在の地に移されたといわれています。神社正面の門は膳所城の門が移築されたもので、国の重要文化財に指定されています。この門の解体修理では、1655(明暦元)年の年号が書かれた札が確認されました。また、柱材には使用されていない仕口(穴)があげられていることなどから、膳所城よりもさらに前の大津城で使用した木材が使われていると考えられています。

歴史文化遺産 地図番号 9 若宮八幡神社

杉浦町 飛鳥時代～



若宮八幡神社

別保村の氏神であった若宮八幡神社は、社伝によると7世紀の創建と伝わります。八幡社は、もともと武士の信仰が厚い神社です。平安時代の落雷や1184(寿永3)年の栗津合戦で社殿が焼失したときも、源頼朝が上洛の際に再興したといわれています。また、江戸時代に入ると、膳所藩主の本多氏に信仰され、歴代の膳所藩主は、土地の寄付だけでなく、社殿などの整備にも力を入れました。表門は膳所城の門を移築したもので、大津市の文化財に指定されています。

歴史文化遺産 地図番号 1 和田神社

木下町 飛鳥時代～



和田神社

社伝によると、7世紀の創建と伝わります。本殿は鎌倉時代後期の建築で、重要文化財に指定されています。また、表門は江戸時代に膳所藩が設立した学校である遵義堂の門を移築したものです。東海道を少し入ったところに位置する和田神社は木下村の氏神でした。境内のイチヨウは、大津市の天然記念物に指定されています。この木には、関ヶ原の合戦で敗れて捕らえられた石田三成が、京都に移送される途中で繋がれたという伝説が残っています。

七二〇	七二〇	七二〇	前七四〇後	七五二	七五五	七五九	七六八	七八四	七八六	七九四	八〇五	八〇六	八一五	八二〇	八五七	八六八	九三五	九四六	九九三	一〇一六	一〇九五	一二六	二五六	二五七	二五九	二六七	二七五	二八四	二八五
平城京へ遷都	『古事記』ができる	『日本書紀』ができる		東大寺大仏の開眼供養		保良宮の造営		長岡京へ遷都		平安京へ遷都	最澄が帰国	空海が帰国 最澄が天台宗を開く					平将門の乱			藤原道長が政治の実権をにぎる			保元平治の乱			法然が浄土宗を開く		平氏滅亡 壇ノ浦の戦い	
			近江国庁が置かれる		建部大社が瀬田の地に移るとい		●この頃保良宮が西大寺領となる		桓武天皇が滋賀郡に梵釈寺を建立する	近江国の古津を大津と改称する		日吉社が天台宗守護の護法神となる	嵯峨天皇が唐崎に行幸し、梵釈寺で僧永忠が茶を献じる	●国昌寺が国分寺となる	近江国の相坂(逢坂)・大石・龍華の三か所に開所をおく	円珍が天台座主となり、園城寺を与えられる		逢坂山の坂の守護神である関禪丸神社に蟬丸霊が合祀されるといわれる		延暦寺より円珍門徒が園城寺に移る		比叡山の僧兵が日吉神輿を押し立てて強訴		●粟津橋本五力庄が内膳司領としてみえる		●後白河天皇が石山寺行幸のとき薬師如来を下賜し国分寺の別所を建立するという		●粟津の合戦にて木曾義仲、今井兼平が戦死	

(●は当地域に関わること)

歴史文化遺産 地図番号 17 御霊神社(壬申の乱伝承地) 鳥居川町・北大路一丁目 飛鳥時代～



御霊神社(鳥居川町)

672年におこった壬申の乱では、瀬田橋の周辺でも両軍が戦いました。戦場に近い鳥居川と北大路には、敗者となって自害した大友皇子をまつる御霊神社があります。御霊神社は、戦乱などで非業の死をとげた人が怨霊とならないように神としてまつったものです。いつ頃から大友皇子が祭神とされたのか、はっきりとはわかりませんが、江戸時代後期の1797(寛政9)年に刊行された『東海道名所図会』にも掲載されており、この地域の人々には古くから知られていたようです。

歴史文化遺産 地図番号 23 へそ石(保良宮伝承地) 国分二丁目 奈良時代



へそ石

『続日本紀』に登場する保良宮は、淳仁天皇が中国の唐にならって平城京とは別に造ろうとした都です。保良宮は、瀬田川西岸の石山付近にあったという説もありますが、現在、その場所を示す遺跡は見つかっていません。国分二丁目の国分団地には、保良宮の建物の基礎の石といわれる「へそ石」がありますが、実際には奈良～平安時代の寺院の塔をささえた石と考えられています。この石は中央が柱を建てるためにふくらんでおり、へそのように見えます。

歴史文化遺産 地図番号 2 禾津頓宮跡 膳所二丁目 奈良時代～



禾津頓宮跡(滋賀県提供)

膳所高等学校内での発掘調査で発見された、奈良時代の大型建物跡です。東西7間(20.8m)×南北4間(11.9m)、床面積247m²の規模で、直径40cm以上の柱が並んでいたことがわかりました。遺跡のある膳所は、石山までを含めて粟津(禾津)と呼ばれていたと考えられています。『続日本紀』には、聖武天皇が東国巡行のために禾津頓宮という仮の宮殿に立ち寄ったことが記録されています。これらのことから、発見された大型建物跡が禾津頓宮跡と推定され、滋賀県の史跡に指定されています。現在は膳所高等学校の敷地に建物の柱穴跡が表現されています。

歴史文化遺産 地図番号 19 石山国分遺跡 光が丘町・田辺町ほか 奈良時代～



窯跡の発掘調査中のようす

石山国分遺跡は、7世紀末から平安時代にかけての遺跡です。瀬田川西岸の丘陵地で、古代には瀬田橋によって対岸の瀬田丘陵と結ばれ、近江国府と並んで、近江において最も重要な地域となっていました。ここには、これまでの調査から、7世紀末に建立され平安時代には国分寺にもなった国昌寺や、平城京の北京として計画された保良宮などがあつたと考えられています。また、遺跡南辺の斜面では、7世紀末、藤原宮で葺かれた瓦と同じ瓦を焼いた窯の跡が3基見つかっています。水路や陸路を利用して大和国(奈良県)まで運ばれたことがわかります。

歴史文化遺産 地図番号 14 今井兼平の墓 晴嵐二丁目 平安時代～



今井兼平の墓

今井兼平は、源(木曾)義仲の家臣であつた武士で、義仲の乳母(母に代わって育てた女性)の子どもです。1184(寿永3)年、後白河上皇の命令を受けた源頼朝軍と粟津で戦い、義仲が討ち死にするとそれを追って自害しました。時代が流れ、1661(寛文元)年、膳所藩主の本多俊次が中庄村のすぐろ谷(現在の富士見台)に兼平の墓を建てて功績をたたえ、1667(寛文7)年には本多康将が東海道の粟津に近い現在の地に移したそうです。墓の周囲には、兼平の子孫によって建てられた燈籠や石柱がならんでいます。また、大津市の史跡に指定されています。

歴史文化遺産 地図番号 21 近津尾神社 国分二丁目 平安時代～



近津尾神社

近津尾神社は、菅田別命をまつっています。昔は、近津尾八幡宮ともいわれていました。平安時代の終わり頃に後白河上皇が石山寺に参詣したときに、石山寺の僧侶に命じて造らせたと言われています。昔から、国分の人々が信仰した神社でした。江戸時代になると、この地域は膳所藩が治めることになり、代々の膳所藩主は近津尾神社に田や山を寄付して、あつく信仰しました。

一六三九	鎖国の完成	
一六四二		延暦寺根本中堂などが再建される
一六五一		●本多俊次が膳所城主となる
一六五二		●国分新田が開発されるといふ
一六六一		●膳所藩主本多俊次が今井兼平の墓を建てる
一六六二		●寛文大地震がおこる、膳所城をはじめ各地で甚大な被害
一六六七		膳所藩主本多康将が今井兼平の墓を現在の場所に移す
一六八五	生類憐みの令	
一六九〇		●松尾芭蕉が国分山の幻住庵に入る
一六九四		大坂で亡くなった松尾芭蕉の遺体が遺言によつて木曾塚に葬られる
一六九八		堅田藩の誕生
一七〇九	新井白石の政治	●膳所藩が京都御所の火消役を命じられる
一七二一		●膳所藩主本多康慶が火伏せの神秋葉権現を茶臼山に勧請
一七二六		●膳所藩主本多康慶が「近江輿地志略」を編さん
一七三六		●膳所藩で「御為筋一件」とよばれたお家騒動がおこる
一七四七	享保の改革	
一七七二		●京都の儒学者皆川淇園が膳所藩に招かれる
一七七八	寛政の改革	
一八〇四		●餅九蔵が膳所谷の植林を膳所藩主本多康元から褒められる
一八〇六		●膳所藩が飢饉に備えて安眠蔵を設ける
一八〇八		●膳所藩が「御為筋一件」とよばれたお家騒動がおこる
一八一六		●中庄村庄屋堀池又三郎茂雅が中庄谷に三池を掘り始める
一八三七	大塩平八郎の乱	
一八四一	天保の改革	
一八五二		●膳所藩校遵義堂が創建される
一八五三		●餅九蔵が膳所谷の植林を膳所藩主本多康元から褒められる
一八五四	日米和親条約	
一八五八	日米修好通商条約	
一八五九	安政の大獄	
一八六〇		●膳所藩で尊王攘夷派のいっせい検査がはじまる
一八六二		●太田重兵衛が膳所藩の命により園山に茶園を開く
一八六五		●膳所藩で尊王攘夷派のいっせい検査がはじまる
一八六七	大政奉還、王政復古	

(●は当地域に関すること)

歴史文化遺産 地図番号 6 膳所城

本丸町 江戸時代～



膳所城跡 航空写真(手前が膳所城跡公園) 平成10年撮影

「膳所惣絵図」(大津市歴史博物館蔵)より膳所城付近

膳所城は、1601(慶長6)年に徳川家康の命令で築られました。北側の矢橋の渡しと南側の瀬田の唐橋を押さえる場所にあり、東西の交通を監視する目的があったと考えられます。本丸と二の丸は琵琶湖上に突き出て橋で結ばれていました。堀も琵琶湖の水を利用していました。また、本丸の東側には四層の天守(右の図では三層に描かれています)がありました。

1662(寛文2)年5月1日に湖西地方を震源とするマグニチュード推定7.6の大地震が起こり、膳所城も大きな被害を受けました。膳所城を修復する際に、本丸と二の丸を合体させて新たな本丸とし、三の丸の西側に堀を作って新たに二の丸とするなど、大工事をおこないました。また、本丸や二の丸の西側には藩の役所や家老などの藩の重臣の屋敷がありました。外側には東海道の両側にそって城下町が

広がり、城下町の西側にも武家屋敷がありました。1870(明治3)年に城は廃止されましたが、本丸の一部は膳所城跡公園として残っています。また、膳所城の門や建物の一部は、大津市や草津市などの神社に移され、今も大切に残されています。



「近江八景図屏風」(大津市歴史博物館蔵)に描かれた膳所城

地域の芸術 おうみはっけい 近江八景 「粟津晴嵐」

江戸時代



歌川広重「魚栄板」 近江八景「粟津晴嵐」 (大津市歴史博物館蔵)

近江八景は、中国の景勝地である「瀟湘八景」になぞらえて、近江南部から選ばれた8つのすばらしい景色のことです。江戸時代初めごろに公家の近衛信尹が膳所城の天守から見渡した景色から選んだとする説が有力となっています。近江八景は、屏風絵や絵巻といった絵画作品の画題として取り上げられ、初代歌川広重や葛飾北斎などが浮世絵として手がけたことにより多くの人に知られるようになりました。近江八景のうち「粟津晴嵐」の浮世絵は、東海道の松並木や膳所城、湖上をゆく帆船などの情景を表現したものです。

歴史文化遺産 地図番号 3 縁心寺

丸の内町 江戸時代～



戸田一西夫妻の墓

初代の膳所藩主の戸田一西が創建し、膳所藩主であった本多家の先祖代々の墓があるのが、膳所城下町にある縁心寺です。元は榮泉寺と呼ばれていました。1617(元和3)年、三河国西尾(愛知県西尾市)から本多康俊が第3代藩主として膳所城にやってきた時、西尾にあった縁心寺の本尊を榮泉寺に移し、名前も縁心寺とあらためました。寺の名は、康俊の父親である酒井忠次の法名(死後におくられた名前)に由来します。境内の墓地には初代城主の戸田一西夫妻の墓があり、寺には戸田一西の木像が伝えられています。

歴史文化遺産 地図番号 12 三池記碑

秋葉台 江戸時代



三池記碑

中庄村の田畑は水の便が悪かったところから、庄屋の堀池又三郎(茂雅)は、1816(文化13)年から翌年にかけて、今の秋葉台に鶴池、中池(消滅)、新池の「三池」を作りました。堀池という苗字も、池を掘ったことに対し、膳所藩主からおくられたものです。1850(嘉永3)年、その功績を後々まで伝えるため、西の庄村の庄屋の小西藤吉(藤吉)が發起人となり、膳所藩の藩校遵義堂の黒田扶善によって「三池記」が作られました。「三池記」は板に書かれたものと、石に刻まれたものが残されています。石碑は高さ90cmほどで三池のそばに建てられましたが、今は雲雀ヶ丘自治会会議所の近くに移されています。



凡例

- ・本書は地域学習のため、各学区の歴史や歴史文化遺産について説明したものです。
- ・年表は日本のできごと、大津市のできごとを示し、本書に関わることについては印をつけています。
- ・執筆は大津市市民部文化財保護課および大津市歴史博物館職員が分担し、編集は文化財保護課にて行いました。
- ・本書の作成にあたり、各文化財所有者の方々にご協力いただきました。

表紙写真 上段：鳥居川水位観測所、中段：「近江八景図屏風」（大津市歴史博物館蔵）に描かれた膳所城、下段：粟津湖底遺跡（滋賀県提供）
裏表紙写真 上段：御霊神社（鳥居川町）、中段：旧伊庭家住宅洋館（住友活機園）、下段：膳所茶臼山古墳の後円部頂上（葬り塚）

- ・総論中の太字については、後のページで解説しています。
- ・掲載画像は、特記のあるもの以外は大津市の撮影または所蔵です。

発行／大津市
発行日／令和8年3月27日
印刷・デザイン／株式会社富士印刷

小学校		
年	組	番
名		
前		